

山のたより

23号 平成8年正月号

編集／発行

〒652
神戸市兵庫区氷室町 1-5-11
行守寺 きょうしん
Tel (078)511-9691 Fax 531-6335

震災復興第2弾

避難所発信

ガシヨー！
賀正

1996

今年からリニューアルスタートします



住職、おもわず叫ぶ も～、ヤメテ！



みんな大震災の直撃を受けて、足腰も立たないほどの被害を蒙り、二度と立ち直れないような話もめずらしいことではない。震災から四ヶ月ほどは、当山とてご多分に漏れず、放置された瓦礫の山をなす術もなく見守るだけの日々を送るしかなかった。『初代が興して、二代目が大きくして、三代目が潰す』の戯れ言が、三代目の住職である私の脳裏をよぎる。ともあれ、大勢の方々のご支援を受けて、復興に向けて動き出した。希望に胸を大きく膨らませ仕事をスタートしたのだが、胃に穴が空くほどの針の筵が待っているとは……。

■イケーッ！
「この山の木、全部切つてまえっ！」

田井社長の号令一下、太い木がショベルカーのアームでいとも簡単に押し倒されたり、チェンソーの餌食になって次々となぎ倒される。山の法面に生い茂っていた笹や雑木も、巨大な鉄の爪でひと掻きすると、文字どおり根こそぎ無くなる。あつと言う間に、山は丸裸。



お寺の土地に隣接したこの写真の土地は水道局の土地。地震後、どれくらいたつた頃だったろうか、水道局の人が様子を見に来た。
「お寺さんも大変ですなあ」
「そうですねん、道が無いから解体できなくて困りますねん」
「そうですなあ、道造らなあきません



るで。それに、書類言うたかて簡単なものでもない。各種図面のほか、いろいろなんや難しいこと言うとした。書類揃えるだけで一年かかるわ。「いてまえーっ」

■約一ヶ月後に、水道局の人が再び見に来た時から、苦しみが始まった。

「何やってんねん！」
ものすごい剣幕に威圧された私は、しどろもどろ。

「いや、その、道路工事を……」
「ここ、どこの土地や思てんねん！誰がこんなことしていい言うた。こんな無茶苦茶なこととして。ここまでされたらワシ責任持たれへんで。住職さんがやな、解体するのに道造りたい言うからやな、こつちも、困つてはんに協力せなあかん思て、書類揃えて許可をもらつて下さい言うたやろ。」

頭のでっぺんから湯気が出ている浄水管理事務所副所長と私のやりとり、大勢の作業員も建設機械も凍り付



なあ」
渡りに船とはこのことか。
「えっ、道造つてよろしいの？本当ですか」
「まあ、こんな時やから、ちゃんと書類揃えて申請しはつたら許可下りまつしやろ」
「そりや助かります」
街中パニックの中、市役所も潰れて大混乱やのに、申請しても許可下りるのに三年かか



の工事進めたらあかんで。上司に報告しとくから。住職さん、とにかくあんたはすぐ書類を揃えなさい」と、ポンポン怒って帰っていった。

この時点では、荒削りではあるが、なんとかトラックが行き来できるくらいに道ができ

上がっていた。

「社長、建設機械をむりやり寺の敷地まで進めてやね、向こうのほとぼりが冷めるまで境内の道路工事に移って下さい。ほんなら、文句言われることはないやろ」

「そうでんな、お上人さん。もういつでも入りまっせ」

おーいつ、ユンボ二台とも早くお寺さんの敷地に入れてまえ！

の、えらいこっちゃ……。

■夜逃げでもしたるか

電話で責められるわ、大勢で押しかけるわ、やいやい言うな。

役所から十



人ほどやってきた。緑地公園課の三十代とおぼしき女性係長は

「あなた、住職さんでしょう。住職さんがそんなことしていいんですか」と容赦なく責めたてる。後ろに従えた若い役人も援護射撃。

「すみませんでした」

大勢の役人の前で、白衣姿で頭をうなだれ立っている私は、まるで鳥送りの罪人そのものの。

「すみませんで済む問題じゃないでしょう。

どうします？あなたはいろんな法を犯しているんですよ。後で役所に来てもらいます。事情聴取しますから」

この頃は、夜が明けると、今日もまた役所からやって来るんじゃないかと憂鬱になり、陽が暮れると、ああ、今日は来なくて済んだと

胸をなで下ろすような日々の連続。

普段、アホばかり言っている私の様子が、鬱ぎがちなことに女房が気づいた。笑顔が消え、食事の時も何か考えている。視線はテレビに向いているが、考え込んでいる。

「な、もう止めようか」

なにも悪いこと企んで乱開発しとる訳やない。震災復旧するには他に方法がないねん。なんでこんな苦しみ受けなあかんねん。もう、疲れた。

「あなた、大変やけど、がんばって。田井さんもがんばってくれてはるやないの」

涙出そうにうれしかった。またやる気が出てきた。

役所に向くと、会議室に通された。待っている、来るわ来るわ。

水道局の立場からは、用地を無許可で占有し、勝手に地形変更している点。

公園緑地課からは、この地域が国定公園指定のなんやかんやらで一番厳しい法規制区域、要するに、草木一本抜くことも禁止されるほどの規制区域を荒らしてしまったこと。

砂防課からは、建築基準。宅地造成課にも抵触するらしい。



お白州にひきたてられたる行守寺住職教信はお上のお裁きを神妙に受ける。

「その方、面を上げいっ。」

「へ、へーい」

「その方、訴えによると、お上の土地を勝手に使い、道路建設をしていると聞が、間違

やむを得ない仕業であることがわかった。その上、その方の日頃の布教活動により、多くの民百姓が心の安穩を得、無罪放免の嘆願が多く寄せられている。よって、その法功を称え無罪とし、道路建設中の土地山林を行守寺

に供与する。一件落着」
どや神戸市役所のオッサンら、こんな風にかんか？少しは大岡越前守の位牌でも拝んだらどないや。

福元建築設計事務所の先生にお願いして、いた書類がやっと整い、提出した。いろいろ条件がついたものの、その後ウンともスンともなんの音沙汰なし。

■ほこりまみれの本堂解体

金の心配はあるが、心はればれ。巨大な重機が、木立の間をそろりそろり本堂めざして進んで来る。すでにアームの先端は解体用の爪に替わっている。

私は、解体の一部始終を歴史のページとして、ビデオに収めようとスタンバイ。

「カッチちゃん、おまえやレ。勉強や。あんな、上の方からちよつとづつまんてバラしていくねん。そーつとやで」



いないかつ」
「はーつ、申し訳ねえでこぜえますが、お代官さま」

「お上の土地を無許可で使うことは罪に値するが、聞くところによると、この度の大震災により本堂全壊の被害を蒙り、復旧のための



本堂の前まで操縦してきた、ベテランオペレーターが、若いかしらを教育している。

「その屋根裏の木あるやろ、あれをつまんて引っ張れ。ソーッとやらなあかんで」

カッチちゃんはベテランオペレーターに指導をうけながら、慎重に解体作業を進めている。

「オイオイ、押したらあかんやないか。庫裡の方までめいであうど」

素人から見たら、簡単にブツ壊せそうに見えるが、特に隣接した家屋がある場合なんかよほどの熟練した技術が必要とするらしい。

「若いもんが、間違うて隣の家を解体してもうた言うて、友達が頭かかえてまんねん」

お上人おもしろい話、なんぼでもありまつせ、と社長が言うように、町が無くなるほど解体が行われている神戸の被災地では、無数の喜悲劇があるようだ。

途中、学校から帰ってきて、学生服のままの息子と、交代しながらビデオ録画。ユニボのアームが本堂の屋根に振り下ろされる度に、前が見えなくなるほどの土煙。二三時間ほどで廃材の山ができた。

何日かおいて廃材の撤去作業が始まった。やってきたダンプの運転席から下りてきたのはなんと、かわいいこちゃん。やつと、更地になった。



とりあえず仮本堂



「お盆の法要ですか、はあ、だいじょうぶです。間に合わせます。プレハブですから、工事始めたら、完成は早いですよ」
8月16日のお盆法要まで、あと一週間。あと五日。あと三日……。
ぜんぜん来てくれへんやないの。日生ビルドに電話すると、すぐ手配して、せめて壁だけでも仕上げますと言う。どうせ完成が無理なら、このままにしといてくれ。壁が無いほうが、涼しくていい。



床と柱と屋根だけの本堂で、お盆法要を勤めるはめになった。
「えーつ、皆さん、ご参詣ご苦労さんです。……と言うような経過で、このような形でお盆の法要を営むことになった訳です。むしろこの方が、風が通って涼しいだろうと思ったんですが……」
全く無風状態。
「まだ電気も引いとらへんから、扇風機も使われへんし、風も全くあらへんやないの。こんな殺生やでえ。もうあかん！」(陰の声)



9ヶ月ほど、外にシートをかけて置いておいた仏さんや仏具を、やっとおまつりする時が来た。『まんだらや』の武士さんの指示を受けながら作業を進めていく。女性軍は仏具をみがいている。「清水さん、それ、お上人のシャツやないの」「えっ？ほんまかいな」
暑くて脱いでいたシャツを、清水さんがボロボロだと思って、仏具を磨いていた。「お上人、あんな汚いシャツを着てはるからや」と、女房。にぎやかやねえー。

汗だくの リューアルオープン

黙祷だけでほんとにいいの？

阪神大震災物故者第一周忌慰霊法要
■とき／平成8年1月17日(水) PM1:30 ■ところ／神戸市立中央体育館
阪神バス徒歩10分／地下鉄大倉山駅徒歩1分

やっぱり大勢の人がお題目を唱えてあげなければ……。

あんなに多くの人達が、あんなに苦しみながら亡くなっていったのに、形式だけの追悼セレモニーでも早く仏さまのふところに入れて、安らかな心を取り戻せたら、私達が後押ししてあげなれませんか。

仏さまの心であるお題目を唱えることなんです。遠のことを考えると、平成8年1月17日のお題目を唱えていたんです。お題目はしなげ

ご家族、親戚、友人などで亡くなられた方々を一緒に供養しましょう

ご供養料などすべてご辞退致します
お坊さん100人でお経をあげます
お誘い合わせおこしください

宗教不問



をお祈り申し上げます

お題目で安らかに……

阪神大震災物故者第一周忌慰霊法要
■とき／平成8年1月17日(水) PM1:30 ■ところ／神戸市立中央体育館
阪神バス徒歩10分／地下鉄大倉山駅徒歩1分

オレはもういいから早く逃げる！
あと、お母さんをたのむで……

瓦礫に押しつぶされ、もたえ苦しむ肉親を助け出すことができない。もうそこまで火が迫っていると、死にものぐるいで救出作業を続けて、どうけど、もう熱くて、そのまま、しようもなく、そのままだ……。

宗教不問

ご家族、親戚、友人などで亡くなられた方々を一緒に供養しましょう
ご供養料などすべてご辞退致します
お坊さん100人でお経をあげます
お誘い合わせおこしください



心からご冥福をお祈り申し上げます

身延山の 日蓮宗
主 僧／日蓮宗京都府支部長 日蓮宗京都府支部長 日蓮宗京都府支部長
事務局／日蓮宗京都府支部長 日蓮宗京都府支部長 日蓮宗京都府支部長
TEL 078-221-5280

ちよつと仕事の手を休めて
ちよつと予定を変更して
ちよつと時間をずらして
ちよつとゴルフの日をのびして
亡くなった方のために時間を作ってください。
おねがいします

題して

変化の人たち

二十代の若いお坊さんたちが大勢やってきた。隊列組んでやって来る姿の頼もしいこと。ダーッと仕事して、ドーッと銭湯にくりだし、サーッと新幹線で帰った。



の山。
「これ見るたびにタメ息が出るわね」

全壊の本堂からかろうじて取り出した仏像と仏具を取りあえず庫裡に押し込み、解体が終わると、庫裡の修理にかかるからいついつまでに家の中を空っぽにして下さいと言う。

「えつ、空っぽにせなあかんの？全部出すの？」
「そうです。傾いている家を引っぱって起こさなあかんので、壁も天井も床も全部ひん剥いて、柱だけにしますので……」

「えーッ？これを全部？」

と絶句。
「とにかく、解体屋さんが入るまでに全部出してもらわないと仕事ができませんので、それまでお願いします」

それからというものの連日連夜の作戦会議。本堂から運び出す時もボランティアグループに来てもらったり、檀家の人達に手伝っても

らったりしている。みんなそれぞれ大変な状況の中「お寺さんのこっちゃから」と無理して来てもらっていることを考えると、そうそうあまえてばかりいられない。それに加えて、いちばん戦力としてあてにしていた高三の息子は、震災直後からの連日の力仕事で災いし、椎間板ヘルニアの手術で一ヶ月の入院加療。すでに退院し、不自由のない日常生活を送っているとは言え、腰に負担のかかる力仕事は止められている。

「いずれにせよ、戦力はオレとお前二人だけやねん。街中《がんばろうや、神戸》の垂れ幕が下がつとるけど、これ以上どうやってがんばれちゅうねん。二人とも倒れてまうぞ、このままやつたら」

「ねエ、サエちゃんやとテル子さんに頼んでみようか。台所用品とかいろんな生活用品はまだそのままだやんか。運び出すまでにまとめとかなあかんやろ、サッと運び出せるように。仏さんとか仏具なんかはあなたにしかわからへんけど、台所用品とか家庭用品なんかやつたらわたしでないとわからへんから、お友達と一緒にボチボチまとめるわ」

防塵マスクを手で下ろし、背筋をグーッと伸ばしてちよつと一服。

「しんどいなあ」

来る日も来る日も荷物の整理が続いた。タン

スの隅、押入の奥、倉庫から何十年も目の目を見ない不要品を、この時とばかりに廃品処理にすることにした。

廃品回収の日。トラックの荷台に山と積んだ廃品を町内の指定場所に運ぶ途中、市の環境局のゴミ収集車とかち合った。トラックで廃品を運んできたのを見つけたゴミ収集のオッサンは私のそばに駆け寄り、すごい剣幕でまくしたてた。

「オイッ！コラ、お前そのゴミどこから持ってきたんや！言うてみんかいコラ」

「どこからって、この町内のもんやないか」「ウソつくな、コラッ！なんで町内の者がゴミをトラックで運んだりすんねん。しかも荷台に満載しとるやないか。よその町から捨てに来るのんは禁止されとんのや。どこから来たんやッ！」

ゴミのオッサンは私を条例違反者と決めつけて譲らない。こんなバカげた押し問答は早いこと止めにしなければ。

「オッサン、こんなしょうもない事であんたとケンカしとる暇ないねん。あんたにひとつ忠告しとく、その口のきき方イつけや」

「お前にそんなこと忠告される筋合いはないッ。文句があるんやったら役所に電話して来んかい。いつでも相手になつたる」

震災後、平常時の何倍もの荒ゴミで他府県

の応援を得ても処理しきれないような状況に、ゴミ収集のオッサン達も殺気だっている。「お前みたいな悪い奴がおるから、みんなが迷惑すんねん」と、違反者を摘発した荒ゴミGメン気取りのオッサンも、ちやうどゴミ出しに来た町内の人の「あら清水さん、どうしはったんですか」の一言で一件落着。「ねエあなた、考えてくれてる？庫裡の荷物、もう運び出さなあかんのよ」
「うーん、みんな忙しいなあ。かと言って、二人だけではでけんしなあ……」
考えても名案があるうはずもないのだが、夫婦して頭をかかえている時、突然の朗報。願ってもない話であるものだ。
矢尽きて刀折れ、正に討ち死にせんとする時、援軍来るの吉報。
震災被災地神戸に於けるボランティア活動を通して布教実践を学ぶ、という目的の日蓮宗布教研修所研修生一同。言わば、あすの宗門を担う二十代の若き精鋭たち。統制のとれた連携プレーと機敏な行動で搬出作業が進められ、みるみる間に庫裡の空間が広がってゆく。時折、指示を与えながら作業を見守っている、「ご住職さま、これはどちらにお運びしたらよろしいでしょうか」と声をかけられる。丁寧な言葉遣いに、あ、ご住職さまはわたしのことが、と作業服の襟を正してしま



洛中落書

絶え間なく身振り手振りのジェスチャー。時折目を細めて「ヒーッ、ヒーッ」と大きな体軀を揺すりながら甲高い声で笑い、リズムカルにどんなことでも話を面白く展開する、デーブ大西。ただあんぐりと聞き入っていると、「聴いてるか？ 清水さん」突然振り向けてくる。ハイテンポの会話に、私にはちょっとついて行けないが、人を引きつける彼の才能は希有の存在である。

しょっちゅう合ってはいるが、先日久しぶりに、京の都で酒席を同じくした。「実は……」と切り出したその席での話題は圧巻。

ちょうど大阪に来ることになった、かのオウムの荒木広報副本部長を、彼の両親に頼まれて脱会説得することになった。「ワシな、何遍も深呼吸してな、ぜったい負けへんぞ、って両手をしっかり握りしめてな、待ってんねん……」二次会に行く道すがら、「大西さん、さっきのネタちょうだい。今度ゆっくり取材させてな」と了解を得たものの、阪神大震災一周忌法要の準備に忙殺され、その間隙をぬって《山のたより》を作る始末。どこにそんなヒマがある。

そのかわりと言っちゃあなんだが、別ネタ一題。さすが京都の料亭は便所まで京風。水墨画の色紙が掛けてあって、一句染めてある。用を足す位置の正面。いかに一杯機嫌の客に迷惑を蒙っているか。『急ぐとも心しずかに手に持ちて外にこぼすな松茸の露』
ウーム、しからばお返しに一句。『こぼすほど酔ってへんわいこれを見ろそれが証拠に天を突く』

◆ 11ヶ月ぶりに灯がともる

このお寺はまるで山城のように、どこからでも見える。下から毎日お寺を見上げていたけど、地震後、お寺の灯が消えて寂しい、と言う。十二月にお参りに行ったら、この頃明かりが点いているけど、住めるようになってよかったですねと。

実のところ、誰も住んでいない。仮住まいの車庫では仕事ができない。まだ工事中だが、とりあえず私の事務所だけ固唾毛手（かたずけて＝パソコンのしわざです）夜遅くまで仕事している訳です。山奥の一軒家で、深夜まで一人で仕事するのはなんとも無気味なもの。

11ページまで完成して、やっと最終ページまでこぎつけた。肩の荷が降りて、気分はルンルン。階下で作業をしている大工さんの電気鋸の音と、FMから流れる、シャ乱Qのつんくが歌う、エーッと……、なんやら言う歌を聴きながら。（シャ乱Qのつんく、ちょっと若いモンやないと言われへんで）ここの事務室だけ地震前の状態にもどし、以前の雰囲気《山のたより》を編集作業しているところへ、高1の娘がコーヒーを持ってきた。「ワーツ、なつかいしなー。メッチャなつかしいわあ」と部屋の中を見回す。

歴史に残る、車庫で迎える正月。

あれから一年。

みなさん大変でしょうが、元氣を出しましょう。お寺も元氣よくやっています。

おしらせ

広報課長
清水教信

お寺の檀家さん信者さんだけでなく、どなたにも差し上げます。もちろん無料。お友だち、ご親戚、息子さんや娘さん、お名前とご住所をお知らせ戴ければ、お送りします。せっかく作ったものをできるだけ大勢の方に読んでいただくことが、私のよろこびです。

バックナンバー残部少々